

外国語としてことばを覚えるということ

文学部 春海 聖子



2000年に文教大学文学部英米語英米文学科に赴任しました。英語学演習（発音に関する授業）、第二言語習得理論、応用言語学、英語表現論、英語運用論などを担当しています。今年度から、大学院でも言語習得理論について担当しています。大学卒業後、すぐに教壇に立ったのは長崎県の中学校でした。以来、言語教育、外国語教育に従事し、教える対象、場所、レベルなど時に応じて変化してきましたが、ことばを学ぶこと、教えることの魅力に日々、魅せられています。（はるみ・せいこ）

外国語としてことばを学ぶ・教える時には、母語としてことばを習得する時と類似していることあれば、全く考えなかったようなことや、難しいと思うことがありますか。ことばを使ってメッセージを送る、理解を深めるには、たくさんの言語的・社会文化的要素があります。授業で取り上げてきたこと、学生と一緒に考えてきたこと、共に学んできたことに触れてみたいと思います。

1. 第二言語習得・外国語習得とは

第二言語習得・外国語習得と言うことばを聞くと、とても難しいことのような響きがあるかもしれませんが、端的に言うとも語以外のことばを習得することを意味します。日本は、モノリンガル国家として見られる傾向が強いのですが、一歩世界に足を踏み出してみると、政治的、歴史的、民族的理由で一国家の中でいくつもの公用語が共存することは多くあります。それぞれ異なった社会環境で生活するとき、母語だけで十分にコミュニケーションが取れる場合もあれば、必然的に第二、第三の言語を習得する必要がある場合があります。アジア諸国の中にも香港をはじめ、第二・第三言語としてことばを同時に習得していかなければならない場合と、生活の上ではさしせまった必要性はないけれども将来のために、学問の一部として、また世界を広げるためにと外国語として母語以外のさらに多くのことばを学ぶ場合があります。目的は人それぞれ異なるのですが、ことばを新たに習得するとき、様々な言語的、社会文化的要素を学ぶ必要性は等しく存在すると言えるでしょう。

では、新しいことば・外国語を学ぶとき、

具体的にどんなことを学んでいったらよいのでしょうか。これは、どの授業でも最初に学生と一緒に考えてきたことです。難しい質問ではありませんが、考えることによって言語学習の深さ、おもしろさを新たに考えさせられます。

言語学習には、大きく分けて言語的要素（発音、文法、語彙など）、社会文化的要素（それぞれの文化が所有する社会・文化的価値観、またそのルールなど）と言語運用能力（知識を使って実際にことばを使ってコミュニケーションを取る力）が等しく必要であると言われています。これらの要素について以下の三つの授業で実践してきたことをご紹介します。

2. 言語的要素（英語学演習）

言語的要素にはいくつかの要素が含まれていますが、英語学演習の授業では英語の発音の演習ということで、実際に英語の音を声に出して発音し、また実際にコミュニケーションを通して使ってみるということを実践してきました。ゆえに、学期当初は英語の子音・母音を音素、単語レベルで、発音記号と一緒に一通り覚えることから始めます。と同時

に、短文のレベルで徐々にコミュニケーションを取っていくとき、そこには音を超えた、多くの要素が必要になってくることを何度も実践しながら、感じて、発見してもらうことを大きな目標にしています。これはどの言語にも関わってくるのですが、相手に自分の考えを伝えるために、また相手のメッセージを正確に理解するために、正確な発音をすることに加え、イントネーション、リズム、テンポ、強弱、アクセント、間の取り方、スピードなどたくさんの言語的要素が必要になってきます。これらを考慮しながら、実際に学生自身がどんな英語を、どんな風に話しているのか意識してもらうことを学期を通して時間を取ってもらっています。自分の発音に関する自己分析テープの提出：学期中に何度か、教科書の共通課題と、自由課題を与えて自分の発音をテープに録音してもらい、さらにそれを聞いて、上記のいくつかの観点から、自分の発音を自己分析してもらい、うまくいったこと、いかなかったことも含め、コメントを書くことで発音、コミュニケーションに対する意識を常に持つという訓練を試みています。当初は必ず自分の声を聞くのは恥ずかしかったという学生が多いのですが、普段はあまり意識していないことも発見する機会があり、回を重ねるごとに自信を持って、少しずつ自分の発音に磨きをかけていくという姿勢にわたしも多くのことを学びます。教師側のコメントを記しながら、短期間ではありますが、その変化に驚くことも少なくありません。

3. 社会文化的要素（言語運用論・言語表現論）

自分自身の考えを正確に伝える、また相手から送られてくるメッセージを正確に読み取り、コミュニケーションをとるためには、文法などの言語的な要素だけでなくその言語が持つ文化的価値観や、またそのルールを知る必要があることはみなさんもいろいろな場面で感じていることでしょう。言語運用論・言語表現論という授業では主に書くこと、話すことを通して英語圏の社会言語的ルール・コミュニケーションに関する価値観の違いなど

を学んでいます。あいさつの仕方やジェスチャーの違い、時間・約束事に関する感覚の違いなどをはじめとして様々な価値観を発表してもらうことを中心に授業を進めています。プロジェクトワークの実践例としては「イギリス」というテーマをもとに、グループ単位でさらにテーマを設定してもらい（音楽、スポーツ、児童文学、ロイヤルファミリー、歴史、観光地、公園などのテーマでグループ発表がありました。）その中で見えてくる文化的価値観、感じたことを英語を使って、また、授業で平行して学んでいる英語のプレゼンテーション、ライティングの知識をもとに、発表をしてもらいました。学生自身が、自ら視覚的、聴覚的資料を準備したり、グループで工夫をして発表をしている様子、またその発表を客観的に参観して意見を述べる学生の様子には教師としても、その工夫と感性、英語での表現力に多くの驚きと発見があります。



大英博物館についての発表



ロンドン橋についての発表

4. 言語運用能力（応用言語学・第二言語習得理論）

コミュニケーションを取る上で言語的、社会言語的知識を備えていることに加えて必要となることはそれらの知識を、ことばを用いて実際に使うことができる能力であると言われていています。そこで、ことばを使ってコミュニケーションをとるとはどういうことかについて改めて考える授業が第二言語習得・応用言語学の授業です。時代を追って提唱されてきた言語習得理論を学ぶこともとても興味深いことで、とくに第二言語学習開始年齢の時期については様々な研究結果を知った上で、学生の間でも様々な見解が出てくることはとても興味深いものです。また、バイリンガルの言語習得や、海外の外国語教育プログラム、アイデンティティの問題など、母国語を習得する段階では意識しないようなトピックについても取り上げています。授業では日本在住の外国人や、帰国子女などの取材ビデオの鑑賞などを通してことばを学ぶことの意味や、外国語・第二言語としてことばを学ぶことを新たな視点を持って考える時間としています。これらの問題は、学生達の身近でそのような環境があり、実際に様々な形で第二・第三の言語習得を経験した人、またそれに付随して様々な考えを持っている人達と接することでさらに深い学びができることと感じています。現在でも学生によっては居住地域内で様々な文化的背景を持った人と接する機会を持つ人も幾人か見受けられ、その時の経験、感じたことなどを分かち合ってもらいました。日々の生活の中で、職場でもこれからも外国語とその文化に関わっていくだろうと思われる学生達がこの授業を通して感じたことをさらに深めていってくれることを楽しみにしています。

5. イギリス語学文化研修

毎年二月から三月にかけて、英文科の学生を中心にイギリスにて語学文化研修を行っています。毎年、交代で英文科の教員が引率をしている研修です。かつて、わたしも一度引

率をしたことがあり、その時の学生の様子、実生活の中で生きた英語を学ぶと言うことについてここで触れてみたいと思います。

この三週間の研修では学生はホームステイをしながら、ロンドンの英語学校に通学します。研修ではもちろん参加者は英語力の向上を目指していることと思いますが、それ以外にも実際に英語を使って生活をし、勉強に取り組み、ホームステイを通してその文化や習慣、考え方コミュニケーションの取り方の違いを直に感じるわけですから、大変印象深い三週間になるようです。初めての海外渡航である場合も多く、渡航前は緊張した面持ちがうかがえます。

イギリスに到着した直後はどうでしょうか。到着した直後、特に一日目はわたしに向けられる質問がとても多いというのが今でも強く印象に残っています。ただ、日を追うごとにその質問は教員を通してではなく、直接的なものになっていく様子、電話や、チケットの購入、レストランでのやり取りを通してコミュニケーションが出来たこと（うまくいったことも勘違いも含めて！）を生き生きと語ってくれる姿を頼もしくさえ感じたものです。言語の習得、コミュニケーションを取ることの喜び、動機はこうして少しずつ養われていくものなのだなぁと客観的にはありますが、その充実した日々を共に過ごせたことを嬉しく思ったものです。

というわたしも、かつて留学生として英国にて学んだことがあります。学校で、日々の生活の中で驚いたこと、知らなかったこと、共感したこと、本当に様々な貴重な経験をしたものです。そして、様々な人たちとの出会いはもちろん、一つ一つの出来事、経験を通して様々なことを学びました。その中で、特に感じたことはことばを使って表現することの大切さです。もちろん、どの言語でも理解すること、表現することの大切さは変わりません。しかし、多種多様な人種、宗教、考え方、そして英語自身が持つことばの論理、表現方法は、ことばを使ってできるだけはっきりと自分の考えを伝えることの必要性を教え

てくれたのです。そしてこの英語を通したコミュニケーションは、さらに多くの出会いをもたらすものであると感じています。



イギリス語学文化研修にて

おわりに

わたしの授業と題して、ことばを学ぶということ、またいくつかの授業を紹介してきました。またイギリスの語学研修や、自身の留学体験にもふれましたが、ことばを学ぶこと・教えることのおもしろさ、喜び、驚きはいつも変わらずさらに多くのことを教えてくれています。わたしの授業の多くはワークショップ・演習形式のもので、講義であっても発言を求められるので最初のうちは慣れない学生もいるかもしれません。しかし、授業を通して学生と対話することにより、また学生に様々な言語学習に関するトピックと対話してもらうことで、ことばに対する意識づけ、ことばを観察する力、考察力、表現力の向上を全ての授業の一番の目標にしています。現在学生達が学んでいることがさらに様々な色をつけて学生達の中に鮮やかな華となっていくことを楽しみにしています。

また、学生達にとって、文教大での学びの時、そこで考えたこと、感じたことが今後様々な場面でより深みを増すものであることを願いながら。